

2020年6月28日

## 「信じます、わたしの不信仰を助けてください」

マルコによる福音書9章14-37節

森島 牧人 牧師

本日与えられた聖書は、山上の変貌の後、主イエスが三人の弟子を連れて高い山から人々の待つ麓へ下りて来られたところから始まります。〈麓〉とは、昔、シナイ山で神の言葉をいただいたモーセの帰りが遅いことに苛立った民が、祭司アロンに金の子牛を造らせ、その前で飲み食いし戯れたと、出エジプト記にあるように、常に偶像の支配する人間の世界でした。本日の舞台となる麓でも、「一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。」(マルコ9:14)とあるように、主の不在の中で、対話ではなく論争がなされていました。「なにを議論しているのか」とお尋ねになった主イエスの前に立ったのは、息子の癒しを求める父親でした。この後、物語は続きますが、この二つの物語、すなわち前回学んだ山上の出来事と今日の癒しの奇跡の出来事とは一つの流れであり、それぞれの出来事の向こうに同じ〈恵み〉が告げ知らされているからです。それは、病んだ子どもを癒された主イエスこそ救い主・メシアであり、三人の弟子たちが目撃した山上での主の栄光の姿と、「これはわたしの愛する子。これに聞け。」との神の声には、この主イエスが〈神の国〉の王であることが示されており、旧約の詩人が待ち望んだ〈神の御心だけが支配する決定的なこと〉が、主イエスにより始まったという福音の出来事を告げ知らせるものであったからです。

しかし、麓に着かれた主がご覧になったものは、本来主の力を証しするはずの弟子たちが、子どもに取りついた悪霊の追放に失敗して群衆に取り囲まれ、律法学者との論争に立ち往生している姿でした。その後、弟子たちは自分たちの失敗の理由を主イエスに尋ねます。主の答えは「この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」(同9:29)というものでした。弟子たちは祈らなかったのか。否、そうではない。主イエス不在の中で、主への信頼に揺らぎが生じ、正しく祈ることが出来なくなっていたのです。それでは〈正しく祈る〉とはどういうことでしょうか。それは、この場面では弟子たちに直接的には語られないのですが、しかし、今主イエスと向き合っているこの父親の言葉の中に明確に示されているのです。聖書では、父親が「・・・おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」(同9:2)と言ったのに対し、主イエスは瞬時に、「できればと言うのか、信じる者には何でもできる。」と、その彼の言葉を突き返されています。彼に対する主の言葉は痛烈なもので、それはまさに父親の〈生きる根拠〉を問うものでした。そして私たちは、この主の厳しい問いは、永久に続く私たちへの問いでもあることに、ここで気付かされます。父親は、思いもかけない主イエスの言葉で初めて自分の前にある恵みの大きさとそれに見合った信仰の在り方について知らされたのでしょうか。次の瞬間、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」(同9:24)という叫びのような信仰告白が、彼の口から飛び出したのです。矛盾を内包した不思議な信仰告白でした。しかしこれこそ、主にあるこの出来事の本質を的確に表しているのです。主によって神との出会いへと強引に結ばされたことによる言葉でした。自身の神への信頼も、神の恵みに対する思いも、ともに不十分であったことを知らされた父親は、同時に眼前におられるメシアに、自身の不信仰も矛盾のある信仰告白も受け入れていただいたことを確信し、子どももまた自分をも、さらに家族全員にも主イエスの新しい命が与えられ、神の国の中に救われた喜びに生きて行くのでした。私たち信仰告白共同体である教会は、神と人との生きた関係の中にあることを心に留めて、不十分な私たちをも受け入れてくださる主と共に生きて行きたいと思えます。

(説教要約 羽入田悦子)